

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	養護教諭に関する学会発表演題の動向：日本学校保健学会および日本養護教諭教育学会の分析から
Author(s)	斉藤，ふくみ；堀内，久美子
Citation	熊本大学教育学部紀要 人文科学，53：123-131
Issue date	2004-11-30
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/1215">http://hdl.handle.net/2298/1215</a>
Right	

# 養護教諭に関する学会発表演題の動向

— 日本学校保健学会および日本養護教諭教育学会の分析から —

斉藤ふくみ・堀内久美子\*

## Trends in Themes of Presentations regarding Yogo Teachers

~ From an Analysis of Japanese Association of School Health and Japanese Association of Yogo Teacher Education ~

Fukumi SARTO and Kumiko HORIUCHI \*

(Received October 4, 2004)

It is about 100 years since the yogo teacher emerged in this country. During that time children's health problems have changed along with the changes in the environment that surround them. At the same time, the practices of the yogo teacher also underwent a change. This research looks at past trends in research regarding yogo teachers in an attempt to gain hints as to the direction of yogo teachers in the future. The subject of analysis is themes from Japanese Association of School Health and Japanese Association of Yogo Teacher Education presentations containing the words yogo teacher in their titles. The results of which showed a tendency towards yogo teacher research becoming more subdivided and deeper, and that there is a shift in the type of presenters from university lecturers to teachers in active service. In future, it is important to continue the research steadily with a long-term view of what the role of yogo teachers in school should be.

**Key words :** yogo teachers, academic society, presentation theme, presenter, contents of presentation

### 1. はじめに

養護教諭（当初は学校看護婦として）が、わが国に出現してから100年になろうとしている。養護教諭はその時代その時代の社会環境や社会状況を映し出す鏡として表出された子どもの健康問題をつぶさに眺めてきた。その時々の子どもの変化に伴って、養護教諭は自らの役割や職務を模索し、開拓し、作り上げてきたといえる。長期にわたる養護教諭個人の実践の積み重ねの中から理論的な集約がなされ、1999年には養護学に関する著作<sup>1,2)</sup>が相次いで出版され、ようやく養護学確立の端緒についたといえる。ここでの理論的な集約は養護教諭に関する研究のことである。後藤<sup>3)</sup>が述べるように「養護教諭の研究が積み重ねられることによって、『養護とは何か』『養護教諭の独自の役割とは何か』が明確になってくる。そして、このことが養護教諭の活動の拠り所となる養護学の確立に大きく貢献すると考えられる。」のである。このように一つの学問領域の理論化を成すためには、その領域に関する

研究の営みの蓄積が基盤となるであろう。現在、学校には教育以外の様々な領域の専門職が登用され、養護教諭の専門性が厳しく追究されている。このような中で、これまでの養護教諭に関する研究の動向を捉えることは、今後養護教諭がいかなる方向に向かっていくべきなのかについて何らかの示唆が得られるものと思われる。

昨年は日本学校保健学会が第50回大会を迎え、日本養護教諭教育学会も前身の全国養護教諭教育研究会から通算して第11回学術集会を開催した。これまで学校保健学会の発表演題を対象とした養護教諭に関する研究の動向は、平識ら<sup>4)</sup>(1976)による報告と学校看護研究会<sup>5)</sup>(1985)による報告がある。前者は演題から養護教諭に直接関係のあるものを対象とし、後者は養護教諭が行った研究を対象としている。本研究は、これらの先行研究からさらに20年近く経過して節目を迎えたところで、両学会の発表演題のタイトルに養護教諭の語が含まれる研究に着目して分析することを通して、半世紀の養護教諭に関する研究を概観した。

\* 名古屋市立大学

## 2. 対象および方法

本稿では、養護教諭に関する研究として、タイトルに「養護教諭」の語が含まれるものを取り上げる。

対象は、日本学校保健学会（以下Gとする）第1回（1954年）～第50回（2003年）の発表演題のうち該当するもの631題と日本養護教諭教育学会（以下Yとする）第1回（1993年）～第11回（2003年）の発表演題のうち同77題、合計708題である（表1）。分析の項目は、年度別演題数、発表者の所属、演題の内容および学会共同研究、シンポジウム等の世話人（司会者）・演題・演者（研究者）等である。

表1. 研究対象

学会名	演題数 (%)
日本学校保健学会	631 (89.1)
日本養護教諭教育学会	77 (10.9)
計	708 (100.0)

## 3. 結 果

## 1) 演題数の推移

1954年から10年ごとに区切ってI～V期とし（表2）、演題数の推移をみると（図1）、Gでは年度を追うごとに増加し、V期では全演題数2331題のうちタイトルに養護教諭の語が含まれる演題は307題（13.2%）であった。一方Yでは、IV期に1993年の4題のみであったのに対して、V期では73題になっていた。

表2. 年代区分

期	年代
I	1954～1963
II	1964～1973
III	1974～1983
IV	1984～1993
V	1994～2003

演題数

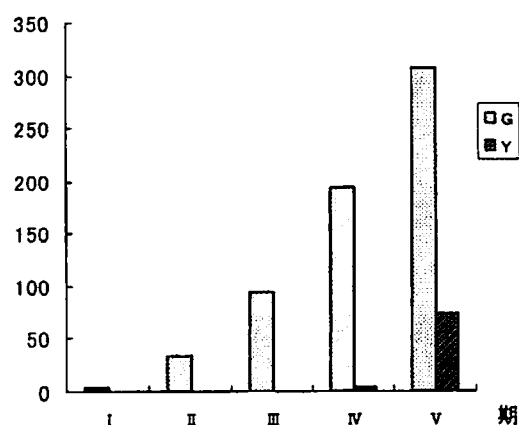


図1. 養護教諭に関する研究の演題数の推移

## 2) 演題発表者の所属

GおよびYの演題発表者の所属をみると（表3）、全体には「大学のみ」が45.1%と最も高く、次いで「大学+現職養護教諭（以下「現職」と略記）」28.5%、「現職」13.3%となっていた。2つの学会を比較すると、「大学のみ」はGの方が有意に高率で（1%水準）、発表者に現職が含まれる演題を全て合わせるとYの方が有意に高率であった（5%水準）。

演題発表者の所属を10年ごとの推移でみると（表4）、「大学のみ」は、I～III期には6割～7割を占めていたが、IV期には4割強、V期には4割弱に減少した。

表3. 養護教諭に関する研究の演題発表者の所属

所属	日本学校保健学会 n=631	日本養護教諭教育学会 n=77	全体 N=708
大学 **	295 (46.8)	24 (31.2)	319 (45.1)
大学+現職	176 (27.9)	26 (33.8)	202 (28.5)
現職	81 (12.8)	13 (16.9)	94 (13.3)
現職+その他	29 (4.6)	7 (9.1)	36 (5.1)
大学+現職+その他	19 (3.0)	3 (3.9)	22 (3.1)
大学+その他	10 (1.6)	0	10 (1.4)
その他	21 (3.3)	4 (5.2)	25 (3.5)

\*\*: $p < 0.01$ \*: $p < 0.05$ 

\*

表4. 演者の所属の年次推移

期	題 (%)							
	大学	大学+ 現職	現職	現職+ その他	大学+現職 +その他	大学+ その他	その他	全体
I	2(66.7)	0	0	0	0	1(33.3)	0	3(100.0)
II	23(67.6)	8(23.5)	2(5.9)	0	0	0	1(2.9)	34(100.0)
III	66(70.2)	12(12.8)	12(12.8)	2(2.1)	0	1(1.1)	1(1.1)	94(100.0)
IV	85(43.1)	51(25.9)	27(13.7)	11(5.6)	11(5.6)	1(0.5)	11(5.6)	197(100.0)
V	143(37.6)	131(34.5)	53(13.9)	23(6.1)	11(2.9)	7(1.8)	12(3.2)	380(100.0)
全体	319(45.1)	202(28.5)	94(13.3)	36(5.1)	22(3.1)	10(1.4)	25(3.5)	708(100.0)

一方「大学+現職」はⅣ期より増加傾向がみられ、Ⅴ期には3割強を占めた。

### 3) 演題内容

演題の内容を天野ら<sup>6)</sup>の分類を参考に11項目に分類して両学会を比較した(表5)。Gでは職務の特定領域40.6%、養成・教育13.8%、職務の種類と量12.4%が上位を占め、Yでは職務の特定領域32.5%、養成・教育20.8%、行政・制度10.4%が上位を占めた。全体でみると職務に関する演題が5割強を占めた。

演題の内容を10年ごとの推移でみると(表6)、職務の種類と量は、Ⅳ期に15題(7.6%)と大きく減少したが、職務の特定領域はⅢ期から増加し、Ⅳ期には96題(48.7%)となった。養成・教育は、Ⅱ～Ⅲ期には8題(23.5%)～24題(25.5%)であったが、Ⅳ～Ⅴ期では24題(12.1%)～46題(12.2%)に減少した。

職務の特定領域を詳細にみると(表7)、健康相談31.0%、児童生徒との対応14.2%が上位を占めた。学会別では、Yにおいて保健指導、保健授業、医療的ケアが10%を超えていた。さらに特定領域を10年ごとの年次推移でみると、演題数が少ないⅡ～Ⅲ期を除いて、1974年以降で増加傾向がみられるのは健康相談であり、他に医療的ケアがあげられる。減少傾向がみられるのは、医療管理下の児童に対する関わりがみ

表5. 養護教諭に関する研究の演題の内容

分類項目	題 (%)		
	G n=631	Y n=77	全体 N=708
職務の特定領域	256(40.6)	25(32.5)	281(39.7)
養成・教育	87(13.8)	16(20.8)	103(14.5)
職務の種類と量	78(12.4)	6(7.8)	84(11.9)
行政・制度	47(7.4)	8(10.4)	55(7.8)
役割・機能	48(7.6)	6(7.8)	54(7.6)
モラル・適応	39(6.2)	3(3.9)	42(5.9)
組織・連携	14(2.2)	4(5.2)	18(2.5)
歴史	13(2.1)	3(3.9)	16(2.3)
評価	12(1.9)	0	12(1.7)
原理	7(1.1)	1(1.3)	8(1.1)
その他	30(4.8)	5(6.5)	35(4.9)

られる。児童生徒の対応、保健指導、救急処置は、年代ごとに変動はあるものの、1割程度を占めていた(表8)。

次に演者の所属と演題の内容をみてみよう(表9)。養成・教育と役割・機能、モラル・適応では「大学のみ」が6割を超えて高くなっていった。評価と職務の特定領域では、「大学+現職」が高率であった。職務の種類と量では、現職のみが24題(28.6%)、評価では、現職のみが3題(25.0%)と2番目に割合が高かった。

表6. 演題の内容の年次推移

期	題 (%)											
	職務の特定領域	養成・教育	職務の種類と量	行政・制度	役割・機能	モラル・適応	組織・連携	歴史	評価	原理	その他	全体
I	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3
II	3	8	9	1	1	3	0	7	0	0	2	34
III	20	24	19	6	10	3	0	3	1	3	5	94
IV	96	24	15	17	13	16	4	1	5	1	5	197
V	161	46	41	30	30	20	14	5	6	4	23	380
計	281	103	84	55	54	42	18	16	12	8	35	708

表 7. 特定領域の内容

内容	題 (%)		
	G n=256	Y n=25	全体 N=281
健康相談	77 (30.1)	10 (40.0)	87 (31.0)
児童生徒との対応	38 (14.8)	2 (8.0)	40 (14.2)
保健指導	21 (8.2)	4 (16.0)	25 (8.9)
救急処置	22 (8.6)	1 (4.0)	23 (8.2)
保健授業	15 (5.9)	3 (12.0)	18 (6.4)
保健室登校	15 (5.9)	0	15 (5.3)
医療的ケア	11 (4.3)	3 (12.0)	14 (5.0)
医療管理下の児童に対する関わり	12 (4.7)	1 (4.0)	13 (4.6)
健康診断	11 (4.3)	0	11 (3.9)
摂食障害	6 (2.3)	0	6 (2.1)
事例検討	3 (1.2)	1 (4.0)	4 (1.4)
予防接種・伝染病	4 (1.6)	0	4 (1.4)
喫煙防止教育	4 (1.6)	0	4 (1.4)
性教育	4 (1.6)	0	4 (1.4)
児童生徒の人間関係	3 (1.2)	0	3 (1.1)
精神保健	3 (1.2)	0	3 (1.1)
その他	7 (2.7)	0	7 (2.5)

さらに職務の特定領域と演者の所属の関係性をみてみた (表 10)。職務の特定領域を全体的にみると、演者の所属は「大学+現職」が 104 題 (37.0%) と最も

高率であった。領域別に上位 6 位まで見ると、保健指導が「大学のみ」11 題 (44.0%) と他の所属に比べて高くなっていたが、健康相談、児童生徒との対応、救急処置、保健指導では「大学+現職」と「現職のみ」を合わせて約 5 割を占めていた。

#### 4) 共同研究

養護教諭に関する共同研究を学会別にみると、G では 50 回の大会の中で唯一 1 テーマだけであった (表 11)。テーマは「養護教諭の養成教育のあり方をめぐって」であり、第 33～35 回まで 3 年にわたって発表された。

一方 Y では、第 6 回から 11 回まで連続してテーマに「養護教諭」の語が含まれていた (表 12)。内容も相談活動、適正配置、研究能力、カリキュラム、健康教育、Yogo teacher の検討等、養護教諭に関わる多角的な領域がテーマとなっていた。研究者も 5 名～11 名まで多数であり、構成員も大学、現職、指導主事等様々な立場の人が共同して研究に携わっていた。

表 8. 特定領域の年次推移

期	題 (%)																	全体
	健康 相談	児童 生徒 との 対応	保健 指導	救急 処置	保健 授業	保健 室登 校	医療 的ケ ア	医療管 理下の 児童に 対する 関わり	健康 診断	摂食 障害	事例 検討	予防 接種 ・伝 染病	喫煙 防止 教育	性教 育	児童 生徒 の人間 関係	精神 保健	その他	
I	1																	1
II	1				1				1									3
III	4	1	3	3			1	3	1			2		1	1			20
IV	28	22	8	5	1	6		5	3	2	4	1	3	2	2	3	1	96
V	53	17	14	15	16	9	13	5	6	4	0	1	1	1	0	0	6	161
計	87	40	25	23	18	15	14	13	11	6	4	4	4	4	3	3	7	281

表 9. 演者の所属と演題の内容

所属	題 (%)										
	職務の 特定領 域 n=281	養成・教 育 n=103	職務の 種類と 量 n=84	行政・制 度 n=55	役割・機 能 n=54	モラール・適応 n=42	組織・連 携 n=18	歴史 n=16	評価 n=12	原理 n=8	その他 n=35
大学	86	71	29	26	34	26	6	12	4	3	22
大学+現職	104	17	19	14	12	12	6	1	5	1	11
現職	37	8	24	10	7	2	2	0	3	0	1
現職+その他	25	2	4	1	1	0	1	1	0	0	1
大学+現職+その他	9	3	8	1	0	0	0	0	0	1	0
大学+その他	6	0	0	0	0	0	1	0	0	3	0
その他	14	2	0	3	0	2	2	2	0	0	0

表 10. 演者の所属と特定領域

題 (%)

所属	健康 相談 n=87	児童 生徒 との 対応 n=40	保健 指導 n=25	救急 処置 n=23	保健 授業 n=18	保健 室登 校 n=15	医療 的ケ ア n=14	医療 管理 下の 児童に 対する 関わり n=13	健康 診断 n=11	摂食 障害 n=6	事例 検討 n=4	予防接 種・伝 染病 n=4	喫煙 防止 教育 n=4	性教 育 n=4	児童 生徒 の人 間関 係 n=3	精神 保健 n=3	その 他 n=7	全体 N=281
大学+現職	32	26	7	10	7	6	5	2	4	1	0	1	0	0	0	1	2	104
大学	17	9	11	9	4	2	7	7	3	5	3	2	3	2	0	0	2	86
現職	12	3	6	3	2	1	0	1	1	0	0	0	1	2	3	0	2	37
現職+その他	15	2	0	0	0	1	2	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	25
大学+現職+その他	5	0	0	0	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9
大学+その他	1	0	0	1	2	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	6
その他	5	0	1	0	2	2	0	1	0	0	1	0	0	0	0	2	1	14

表 11. 日本学校保健学会における養護教諭に関する共同研究の演題および演者一覧

回	年	テーマ	世話人	演題	演者
33	1986	養護教諭の養成教育のあり方をめぐって	小倉 学 堀内 久美子 泉谷 秀子	A班 養護教諭の現代的機能に対応する養成の課題	中尾 道子他
				B班 養護教諭養成カリキュラム全体構想	大谷 尚子
				C班 卒後教育（現職教育）	池田 哲子
34	1987			A班 養護教諭の現代的機能に対応する養成の課題	松本 敬子他
				B班 養護教諭養成カリキュラムの全体構想 養護教諭に必要な教育内容を中心に	中桐 佐智子
				C班 卒後教育（現職教育）	天野 敦子
35	1988			1) 養成教育の改善の視点 2) 望ましい養護教諭像と養成教育の目標 3) 養成教育の内容（一般目標と行動目標を中心に） 1 養護専門教育 2 教職教育 3 一般教育 4) 養成教育内容の展望	大谷 尚子 小林 潤子 石原 昌江 池田 哲子 盛 昭子 浦中 淳

## 5) シンポジウム等

Gにおける養護教諭に関するシンポジウム（小・ミニシンポジウムを含む）は、表13に示すように第15～50回の35年間に15題となっていた。テーマの内容は、養護教諭の職務、養成、役割、専門性、保健の授業、スクールカウンセラー、健康教育、小児看護、職能等であった。

表14は、Yの養護教諭に関するシンポジウム等の実施状況を示した。第4～11回の7年間に11回開催された。うちわけは、シンポジウム5、ワークショップ4、パネルディスカッション2である。内容を見ると、養護教諭の力量、研究能力、ふだんの対応、健康相談、養護教諭の固有性、医療的ケア、健康管理、健康教育、健康相談活動、子どもの発達支援となっていた。

## 4. 考 察

## 1) 養護教諭に関する発表演題の動向

発表演題の全体数が年を追うごとに増加しているなかで、養護教諭に関する演題も飛躍的に増加していた。

GのⅡ期とV期の演題数を比較すると約9倍となっていた。発表者の所属をみると、「大学のみ」が最も高い割合を占めていたが、発表者の中に現職が含まれる演題は5割を占めていた。10年ごとの推移をみると、「大学のみ」は減少傾向にあり、「大学+現職」および「現職のみ」は増加傾向にあった。この傾向は、今後も続くものと思われる。かつて澤山<sup>7)</sup>が「学校保健の基本的課題は、公衆衛生と異なる学校保健の独自性を教育科学の側面から解明することである。」と述べたように、養護教諭の独自性も学校現場における現職の実践の中からこそ生まれるものと思われる。つまり、「養護教諭にとっての研究は、経験から共通の理論を導き出したり、その理論を実証したりするプロセスである。」と定義<sup>8)</sup>されるように、現職の研究が重要な意味を持つ。発表者に現職が含まれる演題はYに有意に高率であったが、このことはYには現職の会員が多いこと、現職の研究発表の場になっていることなどの特徴を示していると思われる。現職の研究の活性化を促すために、日本養護教諭教育学会が果たした役割は非常に大きいといえる。

演題の内容をみると、養護教諭の職務に関するもの

表 12. 日本養護教諭教育学会における養護教諭に関する共同研究の演題および研究者一覧

回	年	テーマ	研究者
6	1998	相談にかかわる養護教諭の力量形成	○森田光子、大谷尚子、大原榮子、鎌田尚子、木幡美奈子、塩田瑞美、竹田由美子、堀籠ちづ子、吉田あや子
6	1998	時代のニーズに応じた養護教諭の適正配置と養成教育の課題 一心残りの事例分析より	○竹田由美子、石原昌江、郷木義子、小林育枝、近藤文子、下村淳子、辻立世、外山恵子、永瀬春美、美馬信
7	1999	日常事例の分析から考えられる力量形成 相談にかかわる養護教諭の力量形成	○大原榮子、竹田由美子、森田光子、大谷尚子、木幡美奈子、塩田瑞美、吉田あや子
7	1999	長期にわたる支援事例（保健室登校）から捉えられる力量 相談にかかわる養護教諭の力量形成	○塩田瑞美、木幡美奈子、大原榮子、竹田由美子、森田光子、大谷尚子、吉田あや子
7	1999	力量形成をめざした養成教育の実態 相談にかかわる養護教諭の力量形成	○吉田あや子、大谷尚子、森田光子、竹田由美子、大原榮子、塩田瑞美、木幡美奈子
7	1999	養護教諭の研究能力に関する研究 第1報 研究に関する実態調査	○外山恵子、浅野純美、門田美千代、河内信子、神戸美絵子、竹崎登喜江、中村朋子、西尾ミツ、藤井寿美子、松嶋紀子、村木久美江
7	1999	養護教諭の研究能力に関する研究 第2報 「研究発表」の現状分析	○山崎隆恵、小林列子、小林央美、斉藤ふくみ、徳山美智子、中川勝子
7	1999	養護教諭の研究能力に関する研究 第3報 研究能力の構造と育成	○後藤ひとみ、天野敦子、有村信子、石田妙美、石原昌江、大原榮子、岡田加奈子、林せつ子、三木とみ子、美馬信
8	2000	養護教諭養成教育におけるカリキュラムの検討 ーカリキュラムの実態調査ー	○池本禎子、大谷尚子、楠本久美子、森昭子、中桐佐智子
9	2001	「養護教諭養成教育カリキュラムの検討（2）」 ー教育内容の構造化を目指してー	○大谷尚子、池本禎子、中桐佐智子、楠本久美子、盛昭子
10	2002	「健康教育に必要な養護教諭の能力に関する研究」 ー実践分析からー	○小林央美、池田みずど、入駒一美、工藤宜子、斉藤ふくみ、中西美恵子、万城公美子、山名康子
11	2003	健康教育に必要な養護教諭の能力に関する研究 第2報 ー実践分析からー	○小林央美、池田みずど、入駒一美、工藤宜子、斉藤ふくみ、中西美恵子、万城公美子、山名康子
11	2003	「Yogo teacher の英語説明文」の検討報告	○植田誠治、天野敦子、後藤ひとみ、竹田由美子、徳山美智子、村瀬久美、山崎隆恵

が高い割合を占めているなかで、その内容は職務の種類と量から職務の特定領域へ、より細分化・深化していることがうかがえた。職務の特定領域の中でとりわけ健康相談が高い割合を占めていることは、養護教諭に関する近年の研究動向の特徴を示している。

次に、「児童生徒との対応」に注目したい。ここの児童生徒との対応は、「健康相談」や「保健指導」「救急処置」の範疇に収まらない領域を指しているものと思われる。養護教諭が児童生徒に対応することそのものであり、養護教諭の機能の中でも、毎日行っている執務にもかかわらず十分な理論化がすすんでいない領域として捉えられる。さらにこの領域の研究が推し進められて、解明が進み、理論化につながっていくことが望まれる。

学会別では、Yにおいて養成・教育と行政・制度がGより高くなっており、Yがこれまで取り組み追ってきた研究領域が明らかに示された。養護教諭の職制と活動を充実・発展させていくためには、養護教諭に関わる様々な領域の研究が行われることが望まれ、そのことが養護学の基盤を堅固なものにしていくものと思われる。

## 2) 共同研究およびシンポジウム等の動向

共同研究では、テーマに養護教諭の語を含まないが養護教諭に関連したキーワードをタイトルに含むもの

は、養護活動、医療的ケア等多く企画されていた。

一方、養護教諭の語が含まれる研究は、Gにおいて1題のみと少なかった。このことは、たとえばGの学会演題申込の際の演題区分の中には、養護教諭の項目が含まれていない<sup>10)</sup>など憂慮すべき課題があり、今後改善に向けて働きかけていく必要がある。

Gにおいて3年にわたって発表された共同研究班の「養護教諭の養成教育のあり方をめぐって」は、カリキュラム構想、現職教育のあり方にわたって広く捉えるとともに、養護教諭の現代的機能を明らかにし、望ましい養護教諭像を養成教育の目標に定めたことは、画期的であった。同共同研究班は、中間報告（その1）<sup>10)</sup>、（その2）<sup>11)</sup>、最終報告<sup>12)</sup>を学会誌に発表するとともに、「これからの養護教諭の教育」<sup>13)</sup>として1冊にまとめた。この共同研究が一つの契機になって、Yが発足したという意味でも注目されるものであった。

Yでは、第6回から共同研究が実施されており全11回のうち13回養護教諭に関する共同研究が発表された。このことは、養護教諭養成教育や卒後教育に関わる課題を共有し検討しあうというYの発足の意義<sup>14)</sup>に沿うものである。内容は先進的なものを取り上げ、新しい活動の提示は学会としての使命を果たしていると思われる。演者も大学に加えて現職が多くなっていた。堀内<sup>15)</sup>は、共同研究の意義について、「研究班員が共に研究することの喜びややりがいを味わうことが

表 13. 日本学校保健学会における養護教諭に関するシンポジウムの演題および演者一覧

回	年	テーマ	司会者	演題	演者
15	1968	養護教諭の職務内容とその養成	村上 賢三	・ 養護教諭の立場から現在の問題点 ・ 養護教諭の専門性と養成制度 ・ 養護教諭の現在と将来について ・ 学校管理者の立場から ・ 文部省の立場から	安藤 志ま 小倉 学 佐守 信男 西川 吉保 能美 光房
19	1972	養護教諭の職務の今日的課題	福留 ハナ	・ 社会環境の変化が養護教諭の職務に及ぼす影響 ・ 養護教諭養成カリキュラムの現状と問題点—養護教諭の専門的機能育成の観点から— ・ 人口の過疎化がもたらす問題と養護教諭の職務について ・ 意識調査による今後の養護教諭のあり方 ・ 養護教諭養成課程における問題	渡部 喜美子 飯田 澄美子 堀内 久美子 神 玲子 石原 昌江 石沢 淳子
38	1991	保健教師・養護教諭の能力とその養成	堀内 久美子 木村 龍雄	・ 保健体育教育教師の能力とその育成—教職・保健体育科教育の現状— ・ 教育実習指導からみた保健教師の能力とその養成 ・ 望ましい養護教諭像とそれに向けての教育 ・ 短期大学における養護教諭養成	家田 重晴 岡崎 勝博 大谷 尚子 中桐 佐智子
39	1992	学校保健と養護教諭の役割	堀内 久美子 鎌田 尚子	・ 確固たるオーソリティに ・ 小学校長から見た養護教諭の役割 ・ 学校保健を担う養護教諭の展望 ・ 養護教諭の地位と法制上の問題点について改善策を（理想）提案したい ・ 養護教諭のすぐれた実践から学ぶ—子どもたちの健康を守り、育てる教育実践とは—	近藤 文子 川村 勇夫 安藤 節子 山口 昭子 木村 龍雄
40	1993	（小シンポジウム） 養護教諭の専門性と教育機能	小林 育枝 川島 令子	・ 担任との授業の協力指導活動（team teaching）について ・ 保健委員指導を通した集団保健指導 ・ 教科「保健」の授業を担当して	鈴木 和子 大西 雅典 加藤 真弓
41	1994	健康教育における養護教諭の役割—その専門性をめぐって—	柳川 協 鈴木 美智子	・ 学級経営に機能する健康教育と養護教諭—「健康な子供の姿」に迫る学校保健活動を軸として— ・ 健康教育における役割—養護教諭の専門性をめぐって— ・ 保健室来室生徒の実態から健康教育へ ・ 北米におけるスクールナースの現状と課題 ・ 教育における養護教諭の役割—小児科医の期待すること—	三木 とみ子 山梨 八重子 辻 立世 高野 順子 豊島 協一郎
42	1995	養護教諭の専門性の確立とその発揮—いくつかの断面から概観すると—	（座長） 大谷 尚子 大橋 好枝	・ ヘルスカウンセリングの専門性と独自性 ・ 救急処置と教師集団 ・ 生涯保健の基礎を培う健康教育 ・ 養護教諭の教育実践研究を通して養護教諭教育の今日的課題を考える	鈴木 美智子 大塚 隆子 節原 香智美 留根 睦子
45	1998	（ミニシンポジウム） 養護教諭は保健の授業を担当すべきか	（世話人） 瀬澤 利行	・ 教育職員免許法改正に伴う養護教諭の「保健」の授業を担当する教諭又は講師になることについて ・ 養護教諭が保健の授業をすることを受け入れる ・ 「改正をプラスに受け止め生かしていきたい」 ・ 「養護教諭は保健の授業を担当すべきか」に関する研究—健康への願いから—	三木 とみ子 今関 登一 佐見 由紀子 川上 スミ
46	1999	21世紀を見据えた養護教諭の養成教育	（司会） 天野 敦子 大澤 清二	・ 養護教諭に求められる資質能力と養成教育のあり方—社会変化及び教育・健康課題に対応した養護教諭養成教育— ・ 養護教諭の立場から ・ 養護教諭養成の立場から ・ 行政の立場から	大澤 清二 木村 龍雄 小笹 典子 後藤 ひとみ 三木 とみ子
46	1999	（ミニシンポジウム） 養護教諭とスクールカウンセラーの連携をめぐって	（司会） 安田 道子 中島 玲子	・ 臨床心理士とは ・ スクール・カウンセラーの立場から ・ 配置校養護教諭の立場から ・ 養護教諭の立場から	亀井 敏彦 前田 由紀子 桜井 敦子 根本 節子
46	1999	（ミニシンポジウム） 健康教育における養護教諭の果たす役割	（司会） 石原 昌江 小西 美智子	・ 日常の養護活動を基盤とした健康教育の推進 ・ 養護活動の評価と健康教育の課題 ・ 教育改革をとおして養護教諭が健康教育にどのように関わったか—「学びたいこと」と「学ばせたいこと」 ・ 組織的な健康教育の推進と養護教諭	小西 俊子 小山 和栄 五十嵐 裕子 西尾 ひとみ
47	2000	養護教諭が進める保健の授業	（コーディネーター） 鈴木 美智子 伊藤 孝子	・ 保健授業元年の法改正に保って ・ 養成教育における保健授業担当者の力量形成 ・ 健康教育のコーディネーターとして ・ 養護教諭の職務の特質を生かした保健授業 ・ 教育行政から見た養護教諭の保健授業—法改正から今日まで—	中村 道子 戸野塚 厚子 節原 香智美 鈴木 裕子 香田 由美
47	2000	養護教諭教育（養成・採用・現職教育）における課題—現場実践を通して成長する養護教諭を育成するために—	（コーディネーター） 大谷 尚子	・ 養護教諭が実践を通して成長するには—私の場合— ・ 卒後の研修を通して自己成長を促すために—現職者研修指導の経験から— ・ 養護教諭の実践と研究の向上をめざした大学院教育—本学大学院入学生動向を中心に— ・ 自己成長していける養護教諭を育てるために—養成教育における養護実習に焦点化して—	砂村 京子 塩田 瑠美 天野 敦子 盛 昭子



49	2002	養護教諭に求められる小児看護	(座長) 津島 直子 笹嶋 由美	・ 小児看護の中の養護教諭の役割 ・ 学校現場における医療的ケア（学校教育とのかかわり） ・ 養護教諭養成教育における小児病棟での臨床実習 ・ 学校保健における看護の役割	木原 キヨ子 芝木美紗子 津村 直子 広瀬 たい子
50	2003	今、改めて養護教諭の職能と職務を考える—今後の変貌を予測する中で—	(コーディネーター) 三木 とみ子	・ 養護をつかさどることの不易と流行—養護教育の立場から— ・ 今あらためて養護教諭の職能を考える—臨床心理士の立場から— ・ 現職研修の課題と指導主事の研修の必要性 ・ 現職養護教諭の立場から考える養護教諭の職能	高橋 香代 久野 能弘 平川 俊功 鈴木 裕子

表 14. 日本養護教諭教育学会における養護教諭に関するシンポジウム等の演題および演者一覧

回	年	テーマ	司会者	演題	演者
4	1996	(パネルディスカッション) 今求められている養護教諭の力量とは—時代の要請に応える養護教諭の育成のために—	(進行) 曾根 睦子 (座長) 中桐 佐智子	・ 養護教諭 1 年目の経験から考える力量とは—理想と現実のはざまで— ・ 時代の要請に応える養護教諭の力量とは—養護教諭 30 年以上の経験を通して— ・ 今求められている養護教諭の力量とは—教育行政の立場で考える力量— ・ 養成教育の立場で考える力量とは—評価の対象となる能力の構成—	熊谷 千賀 斎藤 光子 岡田 禮子 後藤 ひとみ
5	1997	(パネルディスカッション) 養護教諭の研究能力とは—よりよい養護活動をめざして—	(座長) 後藤 ひとみ	・ 養護教諭の研究能力—実践的力量的形成のための課題と提言— ・ 大学院での研修から養護活動を考える ・ 養護教諭の研究能力を考える—安城市研究派遣生の経験から— ・ 働きながら学ぶ—大学院科目等履修生としての経験から—	中安 紀美子 森 千鶴 林 せつ子 平岩 真佐子
6	1998	(シンポジウム) 「子ども達へのふだんの対応を大切にしたい養護教諭」として育つ／育てる	(座長) 堀内 久美子	1 小倉氏の養護教諭教育への期待について—氏自らの教育実践と現職養護教諭の自己教育への期待— 2 養護教諭としての実践の中で得たこと、学んだこと—自らの成長過程の分析で見えてきた養護教諭としてのバックボーン— 3 「ふだんの対応」により磨かれる養護教諭の力量—養護教諭としての視点の広がり—と深さ— 4 自己教育力を培う養護教諭の養成教育—子どもへの対応と自己評価の能力を高める視点から—	石井 浩二 砂村 京子 中川 裕子 森 昭子
7	1999	(シンポジウム) 養護教諭のおこなう健康相談	(座長) 石原 昌江	・ 相談活動における養護教諭としての能力 ・ 養護教諭とスクールカウンセラーの連携 ・ 管理職として、いかに養護教諭を支援するか ・ 健康相談教育の試みとその課題	小原 充子 西部 美志 剣持 雅久 森田 光子
9	2001	(シンポジウム) 21 世紀の学校教育に果たす養護教諭の役割—今、あらためて養護教諭の固有性を探る—	(座長) 三木 とみ子	・ 養護教諭制度の成立と今後の課題—自分史を交えて— ・ 生きる力を育む健康教育と相談活動 ・ 健康管理と健康教育の接点から考える	杉浦 守邦 野村 昇子 山崎 陸恵
10	2002	(シンポジウム) 職制 60 年を経た今、日本の養護教諭の固有性を追究する	(座長) 三木 とみ子	・ 諸外国のスクールナースの現状 ・ 日本の養護教諭の現状と固有性 ・ 他職種から養護教諭を視る ・ 養成側から—職制と今後の展望—	植田 誠治 櫻田 淳 瀬古 淳二 後藤 ひとみ
10	2002	(ワークショップ) 教育現場における医療的ケアと養護教諭	(コーディネーター) 天野 敦子	・ 養護学校における医療的ケアの実際—本校の現状を中心に—	倉田 敦代 丸山 有希
11	2003	(ワークショップ) 健康管理における養護教諭と看護師	(コーディネーター) 郷木 義子	・ 緊急時医療対応看護師配置事業の導入を受けて ・ 様々な職種との連携—本校の現状—	山崎 千賀子 三輪 邦江
11	2003	(ワークショップ) ・ 健康教育における養護教諭と学校栄養職員	(コーディネーター) 松下 美智子	・ 学校栄養職員との連携による保健指導	瀬川 政子
11	2003	(ワークショップ) 健康相談活動における養護教諭とスクールカウンセラー	(コーディネーター) 徳山 美智子	・ 健康相談活動における養護教諭とスクールカウンセラー ・ 養護教諭を取りまく現状と課題—様々な職種の導入をめぐって—	安川 裕美 平松 和枝
11	2003	(シンポジウム) 子どもの発達支援と養護教諭の役割	(座長) 中安 紀美子	・ 関係性を問い直し、公共空間を立ち上げる養護教諭の役割 ・ 子どもの中から生活が見えてくる—教育と医学をつなぐ— ・ 高校生の眼科健診における新しい取り組み—「生徒の目を守る」という立場から—	湯浅 恭正 高橋 香代 石田 法子

できる」「交流を深めることにより意欲や資質を向上させる」の2点をあげている。

シンポジウム等を見ると、Gにおいて1960年代に1題、1970年代に1題に対して、1990年代に9題と大幅に増加した。内容は、職務内容、専門性、スクールカウンセラー、保健の授業等、教育職員免許法の改正に伴って企画されたテーマがみられた。シンポジウムは、発表者の提言とフロアからの発言によってテーマを掘り下げていくものであり、時代の流れに沿ったものが選ばれていたといえる。演者も各回ともに現職が参加していた。

Yでは、第1回からシンポジウムが企画され<sup>16)</sup>、テーマに養護教諭の語を含むシンポジウムは第4回から9回では年1題、それ以降は第10回2題、第11回4題と増加していた。テーマには健康相談活動、医療的ケア等が取り上げられ、わずか8年の間に養護教諭を取りまく情勢がめまぐるしく変化したことがうかがえた。シンポジウム等は、年次学会の大会長の意向を反映している。シンポジウム等で議論されるテーマは、養護教諭に関するその時代の話題であり、議論を重ねていくことにより問題点の共有化や一般化がうながされ、養護教諭に関する理論の整理につながっていると思われる。

## 5. ま と め

日本学校保健学会と日本養護教諭教育学会の両学会で発表された養護教諭に関する演題を分析し、約半世紀にわたる動向をみた。その結果、養護教諭の職務に関するものが5割を占め、養成・教育、行政・制度と続いた。職務の特定領域では、健康相談が3割と最も高率であった。養護教諭に関する研究は、より細分化・深化の傾向にある。

今後は、20年、30年後の学校における養護教諭のあるべき姿について、長期的な展望をもって地道に研究を重ねていくことが重要と思われる。

なお、本稿の要旨は、日本養護教諭教育学会第12回学術集会<sup>17)</sup>(2004年、熊本)で発表した。

## 文 献

- 1) 大谷尚子他：養護学概論、東山書房、京都、1999
- 2) 三木とみ子編：養護概説、ぎょうせい、東京、1999
- 3) 後藤ひとみ：養護教諭と研究(大谷他「養護学概論」第8章)、213、東山書房、京都、1999
- 4) 平識勝子・天野敦子・堀内久美子：養護教諭に関する

- る研究の動向(第1報)日本学校保健学会の一般講演について、学校保健研究、18(6)、280-285、1976
- 5) 学校看護研究会(中尾道子他)：養護教諭による研究の動向 第1報 日本学校保健学会講演集より、学校保健研究、27(1)、36-45、1985
- 6) 天野敦子・堀内久美子・平識勝子：養護教諭に関する研究の動向(第2報)保健・看護関係掲載論文等について、学校保健研究、18(8)、378-383、1976
- 7) 澤山信一：シンポジウム①「教育における学校保健の役割」シンポジウムの課題、学校保健研究、39、Suppl. 55、1997
- 8) 後藤ひとみ他：養護教諭の研究能力に関する研究、第3報 研究能力の構造と育成、日本養護教諭教育学会誌、3(1)、40、2000
- 9) 第51回日本学校保健学会開催のご案内(第2報)、第51回日本学校保健学会演題申込書、学校保健研究、46(1)、88、2004
- 10) 小倉学他：養護教諭の養成教育のあり方をめぐって、学会共同研究中間報告(その1)、学校保健研究、29(1)、52-78、1987
- 11) 小倉学他：同上中間報告(その2)、学校保健研究、29(4)、302-327、1987
- 12) 小倉学他：同上最終報告、学校保健研究、31(4)、311-336、1989
- 13) 日本学校保健学会「養護教諭の養成教育のあり方」共同研究班：これからの養護教諭の教育、(同研究班1990)、東山書房、京都、1991
- 14) 全国養護教諭教育研究会へのおさそい、日本養護教諭教育学会誌、1(1)、102、1998
- 15) 堀内久美子：養護教諭の今日的課題、学校保健研究、37(5)、381、1995
- 16) 全国養護教諭教育研究会第1回研究抄録集、4-19、1993
- 17) 斉藤ふくみ・堀内久美子：養護教諭に関する学会発表演題の動向——日本学校保健学会および日本養護教諭教育学会の分析から——、日本養護教諭教育学会第12回学術集会抄録集、86-87、2004